

岐阜県との境に聳える伊吹山は、標高1377呎、滋賀県の最高峰です。夏になる

と、山頂付近に亜高山性の野草が一面に咲き乱れ(大正15年に「伊吹山頂草原植物群落」として国の天然記念物に指定)、交通の便のよさもあって人気の観光スポットとして大勢の人でにぎわいます。秋や冬の空気が澄んだ日にはその容姿を湖南地域からも見ることができ、多くの人たちから親しまれる存在となっています。また、古来より藁草の宝庫としても知られ、織田信長がポルトガル宣教師に藁草園をひらかされたとも言われています。とりわけ伊吹もぐさの知名度は全国におよんでいます。

辺には、雨乞いに関連する太鼓踊りが今も伝えられています。このように伊吹山は、水の神・水源の神という性格を強く持つ神の山でもあります。奈良時代から山岳信仰の聖地として、多くの修験者が登山して籠っています。今回は、この伊吹山に住まう神とかがわった2人の人物についてみてみましょう。

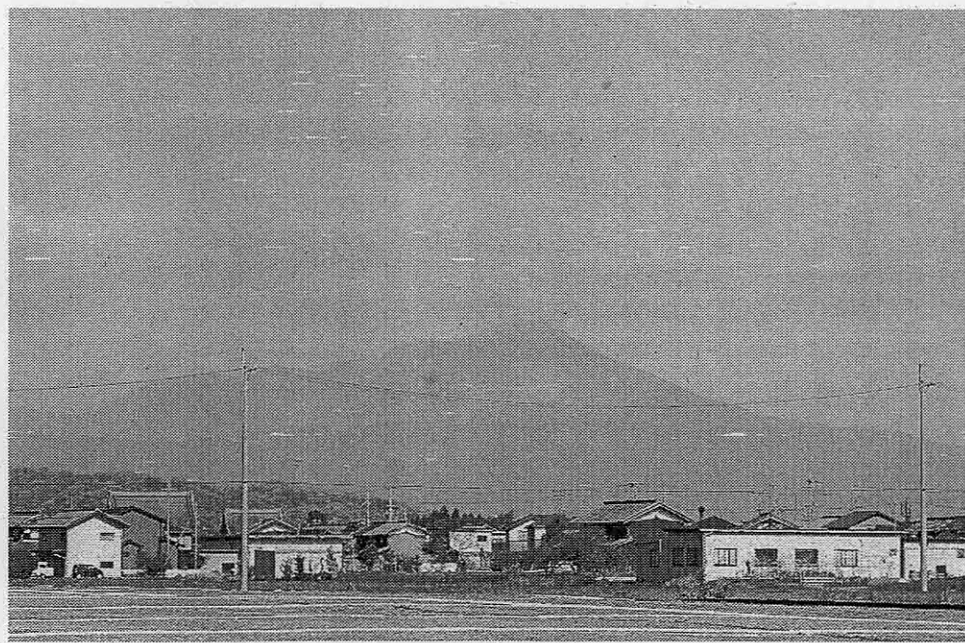
1人はヤマトタケルノミコト(日本武尊・倭建命)です。彼については「存じの方も多いと思います。『古事記』や『日本書紀』に記される伝説の英雄で、景行天皇の皇子とされる人物です。物語のなかで、ヤマトタケルは西へ東へ征討に向かい、各地で強敵を倒し、荒ぶる神を平定します。東国からの帰路、伊吹山の神を討ち取るため、山へ登りました。このとき彼は、神をあとどつてか、または自信があったのか大事な草薙剣を尾張で待つ妻へあずけ、素手で対決しようとした

しかし、この伊吹山にも厳しい一面があります。冬の雪です。なんと世界一の積雪記録も持っているのです。伊吹山麓には、この積雪のおかげか豊富な湧水に恵まれ、泉神社を始め湧水を祀る神社が多数あります。また、伊吹山周



伊吹山頂のヤマトタケル像

## ヤマトタケルと武智麻呂



伊吹山の遠景

伝』には、近江守時代のエピソードに伊吹山が出てきます。それによると彼は、山頂より景色を眺望するために山へ登ろうとします。これは単に良い景色を見たいというわけではなく、国見、すなわち自分が治める土地を高い山の上から見渡すためです。

すると山中で牛のように大きい白いイノシシに出会います。彼はこのイノシシを神の使いだと思い、ほうっておいたのですが、実はイノシシが神そのものだったのです。ここで勘違いしたばかりに、大氷雨を降らせられ正気を失ってしまいました。この後なんとか山を下りますが、このとき神に受けたダメージがもとで、死を迎えてしまいます。

この登山にあたって、地元の人にはヤマトタケルの故事をひいて武智麻呂を止めるのですが、彼は、「私は幼いころから鬼神を軽んぜず敬ってきた。そのことを知っているならば鬼神は私に危害を加えることはない。逆に知らないようであるならば、危害を加える能力もないような鬼神である」と言って山へと登っていきました。途中、神の攻撃を暗示させる蜂に襲われそうになりましたが、それをかわし無事山頂へ至り、眼下に広がる大パノラマを一望したので、そこで人々は武智麻呂の力が神をもくだしたと賞賛しました。ヤマトタケルを死にいたらしめた伊吹山の神も彼の前には屈服したのです。この話は、もちろん武智麻呂を讃えるために書かれたものですが、それとともに中央集権による律令国家によって、かつての荒ぶる神をも支配下に組み込んだ、つまり地方支配の完遂をも意味しているのです。

全国の荒ぶる神を平らげたヤマトタケルをもってしても、伊吹山の神には勝てなかった

ほど近江守を務めました。760年(ころ)に記されたと推定される彼の伝記『武智麻呂